

ふるさと「風」

第二十五号（二〇〇八年六月）

風に吹かれて（ ）

白井啓治

「雑草だって目守れば花のきれい」

雑草という草はないのだけれど、庭の歓迎せざる草々なのでつい雑草と呼んでしまう。実際四、五日前に草むしりをしたはずなのに、雨が上がり陽の射す庭に下りてみたら、もう雑草と叫びたくなる名も知れぬ草達が確りと命を紡いでいる。

身長が僅か二センチにも満たない草なのだけれど、よく見るともう薄紫色の直径二ミリほどの小花を咲かせている。しかも、当たり前と言えば当たり前なのだが、小花の真中には黄色い花粉をタップリと持ったおしべが、花粉をめしべに運んでくれる虫なのか、風なのかを待っているのだ。

小さくても花は命を継ぐための切実な恋の姿なのだから、矢張り綺麗である。必死に明日の希望へむかって命を紡いでいる姿は、高価な薔薇の花に劣らず綺麗である。いや、切花にされて明日に希望の持てない薔薇の花よりも生き生きと綺麗である。

大型連休の終わった日曜日のことであった。

潮来の石蔵で行なわれた友人のオカリナ・コンサートに出かけた。夏を思わせる陽気の中、湖岸の道を走りながら山側に目を向けると、ブナ科のカシやシイの木が真黄色に花を咲かせていた。しかもその数たるや、湖を囲む山々の半分以上を占めるほどであった。

ブナ科の木の実、灰汁の強い俗にドングリと呼ばれるナラの実は殆どがそのまま美味しく食べられる。私の知る食用実のつける種類を挙げても、ブナ、ウバメガシ、アカガシ、シリブカガシ、ツブラジイ、スダジイ、マテバシイ、クリと実に沢山ある。殆どが長い房状のクリと同じような花を咲かせるのであるが、里山の半分以上がその花の色で塗りつぶされているのだから、美事の一言である。

霞ヶ浦を囲んだ山全体が、夏から秋には稔とあって人の口に食べられるのだから実に豊かな地であると、改めて感心させられた。

石岡市に越してきて、峰寺山から旧八郷町の穏やかな盆地を見たとき、「ここがまほろばの地に違いない」と感動したのであったが、初夏の陽気の中に湖岸に接近した里山のカシやシイの木が黄色に染まっているのを眺めると、湖と里山、そしてまほろばの盆地を有するこの温暖な地を常世の国と称する以外ないと納得してしま

う。

ことば座の6月公演では、しばらく続いた旧八郷の風景を離れて、物語の題材を湖に持つていこうと、行方市の三味塚古墳をモチーフに舞い物語を書くことにした。

取材のために三味塚を何度か訪れたのであったが、まだ里山に新芽が出てくる前のことで、ブナ科の木々の多い事は分かっていたが、花が里山をこれ程に染め上げる様子はイメージの中にもなかった。物語を創作するに当たっては、主に石岡市の歴史認識についてを頭に置いて考えを進めていたので、里山の木々の事については脇に置いてけぼりにしてしまっていた。

しかし、霞ヶ浦を見下ろす里山の半分以上が、人の食という暮らしの豊さを支えてきた木々である事をこの目に見てしまうと、古代、常世の国として人が最初に暮らしを始めたのは、この湖岸を囲む里山であったと確信するとともに、石岡市が府中のあったことのみ依存して歴史の里を自称しようとする、発展のない、あるいは発展を拒否した現状が鮮明に見えてきた。

三味塚古墳をモチーフにして書き上げた物語は、歴史家が聞いたら何たる無知な、とあきれ返る根拠のない異説であるが、この地を最初に発見し、ここに暮らしを紡ぐことを始めた古代縄文人を想うとどうしても異説を唱えたくなくなったのである。

その異説とは「三味塚古墳は、墳墓ではなく舞い塚であった」というものである。この地に最初に暮らしをつくった古代縄文人（生粋の日

本原住民族)が、豊かな暮らしを与えてくれる風と大地に対して、感謝の舞を太陽が沈み落ちる筑波山に向かって舞うために盛りあげた塚であった、と勝手な異説を作り上げて、舞い物語として創作したのである。

石岡のことを歴史の里と自称しながら文化的発展を拒否していると言ったが、実際のところ石岡に越してきて真つ先に感じた事は、歴史の里とは言いながら何と歴史的、文化的発展を拒否している処なのだろう、であった。しかし、その答えは直ぐに見え、理解が届いた。

石岡市の歴史において語られることは、石岡が府中であつた事だけで、それ以外に語られるものが全くないのである。しかも語られる内容が、何時も一方通行のものばかりなのである。往来する道がないのである。

その地に語られる歴史に往来の道のない片道の一方通行路しかないという事は、そこに物語がないということになる。つまり、未来への夢と感動のない歴史と言うことになる。

石岡の歴史を尋ねるときその第一声は国府が置かれた地であることと、常陸国風土記に書かれてある、を絶対の拠所としたものの内容でその九〇%が終わるといっても良いほどで、暮らしの物語の語られることのないものである。

しかし、常陸国風土記にもある晡時臥の山伝説に纏わる龍神山を採石場に売り飛ばしてしまつたのだから、常陸国風土記に縋つての一方通行の歴史の里と言うよりもこの先通行止めになっている。夢がないと敢えて言うまでもないこと

なのであるが、実に夢のないことである。

茨城県となった由来の地であるという話もそうである。風土記に書かれてある、平和な暮らしを乱す野蛮な「野の佐伯」「山の佐伯」と呼ばれる土ぐもがおり、それを都から来た黒坂の命が、茨の木をもって退治した、などの話しをそのままに、石岡の茨木台がその地であると信じて疑わない。

しかし、少し調べてみると、茨城が茨木からきたという根拠は何もないのである。何時から茨城あるいは茨木と書くようになったかは定かではないのである。当然、黒坂の命が土ぐもを茨で退治したことから等という事実もない。古くは、「牟波良岐」とこの地名の呼び方を表記していたようである。

黒坂の命の話などは、勝てば官軍の言でもともと狩猟・採取に適した住み良い地に住んでいた縄文人を追い払い、大陸、南方系からの侵略者達(大和民族)が住み着いただけのことである。

常陸国風土記をこき下ろすわけではない。常陸国風土記は、歴史的文化価値のある重大な一つであることには違いないし、その書は夢のある物語ではある。しかし、其処に記載されている内容が、歴史の真実かと言うと決してそうではない。勝てば官軍の書以外の何物でもない。だが、この常陸国風土記は、一方通行の書ではない。その書が一方通行になるのか否かは、その書を用いる人たちの問題なのである。

ことば座六月公演の題材を霞ヶ浦に求めよう

と思った時、突然に文化的発展を拒否しているような印象のある石岡に警鐘を鳴らしたくなり、常陸国風土記に記されている黒坂の命の土ぐも退治の伝説の異聞・余話として三味塚古墳に異説を与えてみようと思つたのである。

「雑草だつて目守れば花のきれい」
目守る(まもる)目(め)を凝(こ)らしてよく見ること。
雑草だけではない。何でも、確りと目を凝らして見つめてみれば、今迄気付けなかった、色々なものが見えてきて、新しい夢や希望を紡ぐことが出来、吾が人生まんざらでもないな、と思えるものである。

ふるさと『風』に声した言葉の二年間を、
一冊の小冊子にまとめました。
風のことは絵作家兼平ちえこ
「ふるさとの風におかれて」
朗読舞女優小林幸枝
「風に舞う」
シナリオライター白井啓治
「移ろう風の中に」
ことば座脚本家近藤治平
「風に吹かれて」
ふるさと風の文庫は、ギター文化館(0299-45-2457)
いしおか補聴器(0299-24-3881)で取り扱っております。

歴史ガイド(同行して2) 兼平ちえ

先月、五月号より、去る四月十二日に行なわれた「霞ヶ浦、常陸風土記を歩く会」の皆さんへのご案内コースを紹介していましたが、今月は、
④ 萬福寺 ⑤ きんちやく石 ⑥ 茨城発祥の地
⑦ 十一面観音堂 まてをお話ししましょう。

④ 萬福寺

ばらき台地を見守るように佇んでいる萬福寺は、西暦一四八〇年常陸国の在庁官であった税所(さいしよ)貞成が開基となり、以来、税所氏の菩提寺として開山されたと言われる。税所氏(府中六名家は、平安、鎌倉時代に国内の正税(年貢米)や官物(官の所有物の収納を司る官職で、後に職名を姓とするようになった。)
萬福寺の宗派は曹洞宗。本尊は阿弥陀如来。寺宝として阿弥陀如来三尊像(県指定、銅造)が安置されている。境内の裏には税所氏の墓地五輪塔数基が存在している。

⑤ きんちやく石

萬福寺の左、脇道を約二十メートル入っていると、畑の中に「きんちやく石」の立て看板が目につきます。

昔、石岡の染谷と村上にある龍神山には、雄龍と雌龍の夫婦が棲んでいた。村の人達は龍神様が籠っている山として、詣でていた。しかし、その尊敬する龍神山に、茨城童子という人間の何十倍も大きな巨人が棲んでいて、夜半に村里に下りてきて人間をつかまえては食べていた。童子は、つかまえた人間を入れる大きな巾着袋

を腰に下げたおり、袋に捕まえた人間を入れるとその口を大きな石の根締めでくくっていた。

近郷の子供達は茨城童子と聞いただけで震え上がった。そのような茨城童子だが、ある時、西の方の国から茨城童子を征伐に来るとい噂が伝わってきた。それを聞いた茨城童子は、すっかり驚いて、裏の方にある三角山を飛び越えて何れかへ逃げ去ってしまった。その時、腰に下げた巾着袋が邪魔だと放り投げた。はずみで巾着の根締めは萬福寺の辺りまで飛んできて、畑にめり込んだのだ。一一〇センチ角もある大きな根締めは、今でも萬福寺のそばの畑に眠っている。(石岡の民話より) 民話に出てくる巾着石は、茨城廃寺の五重塔の露盤(塔の一番上で方形の屋根を押さえ、飾りの相輪を通す穴が開いている石)である。

まさに、畑に突きささっているように置かれてあります。個人の地主の畑の中ですので荒らすことのないようにと願いました。

⑥ 「茨城」発祥の地

きんちやく石を後にして、ばらき台交差点に戻り、右に進む。スーパーの駐車場を通り越しますと左側に、茨城発祥の地を説明する看板があります。しかし、残念ながら文字は風雪に曝されて判読が困難です。

「茨城」と言う地名の発祥の地は、石岡市茨城付近といわれている。その由来について常陸国風土記(七二三年、元明天皇の詔に基づいて土地の伝承、名前の由来、気候や地形等、その土地の風土が記されたもので、藤原宇合(うまかい

：藤原鎌足の孫を中心として編さん完成させた)では次のように記されている。

太古の昔、西に紫の峰を望み、南に入海をひかえた平野に住む人々は、海の幸、山の幸に恵まれ、豊かな暮らしを続けていた。ところが、この広野の中ほどに「山の佐伯」「野の佐伯」という土ぐもがいた。この土ぐもは、人々の住む、平野を荒らし回っていた。彼らは洞窟に住み、平和な暮らしを脅かしたと言う。この為、都から来た長官、黒坂の命(くろさかのみこと)が、この土ぐもを退治しようと計略を巡らし、彼等が穴を出て、山野にいたときを見計らって野の茨野(ばら)からたち等棘のある低木の(総称)を集め、穴の入口に立てて塞いでしまった。黒坂の命は、騎馬の兵士達を差し向け、激しく追ったところ、いつものように身軽に走って、穴の中に潜りこもうとして、茨に突き当たり、ひっかかったりして、茨の棘が体に突き刺さって傷を負い、その為病気になったり、死んだりして、とうとう滅亡してしまったという。

このように、土ぐもを茨によって退治したことから茨城という地名が残った。

この伝説から考えると、茨城県の県花はバラの花。納得できます。

⑦ 十一面観音堂

通り越してきたスーパーの駐車場へ戻り、越えたところを右に入る。民家や畑のある曲がりくねった、古道を思わせる道を三分位下がる。田島公民館(左側)通りに入る。右へ曲がりまもなく田島一丁目十二の表示のところを左へ、約

四〇メートルの丁字路を右カーブしながら民家の間のゆるやかな登りを行くと、右側に十二面観音堂。十一面観音坐像(木造、市指定文化財)は、天台宗廻向山三面寺(廃寺)の本尊で、鎌倉末期から、南北朝初期のものと思われ、穏やかな、天衣の表現、全体に安定感のあるつくりとなっている。

ご開帳は、正月、二月の節分、五月一日といずれも午前五時半から十時まで。今回は、特別にご開帳頂きました。その地区の皆さんの手厚い保護のもとに鎮座する観音さまの慈悲の心をもった端正な面相が印象的でした。

今月は、ここまで。来月は茨城廃寺礎石から出発し、ご紹介いたします。

(参考資料)

「貝地の昔話」貝地町公民館落成記念誌

「石岡の歴史と文化」石岡市歴史ボランティアの会編

美味！ 若みどり (ちえこ)

バレーボール

小林幸枝

二年間ほどバレーボールをやめていたが、いわきのチームから誘いがあった、今年からまた始めることになった。

二月上旬、九人制の試合があり、大会に出場した。連続優勝チームあり、その打倒を目指したが、ミスの続出で準優勝となってしまった。

二月下旬、全国デフカップバレー大会に参加

する。私は四年ぶりに参加であるが、いわきのチームは初の参加であった。結果は二勝二敗で、決勝トーナメントには出場することが出来なくて、悔しい思いをした。来年は、広島で行なわれるので何とか上位入賞を、と思っている。

四月下旬、三年ぶりに川崎の大会に出場した。対戦の組み合わせ運が悪く、初戦は八王子実践OGという名門バレーチームで、大差の負けをきした。次の対戦相手は、勝てるチームだったが、油断して負けてしまった。悔しい思いをしたが、この日私は、ハッスル賞に選ばれ少し気を良くして終わることが出来た。

五月二十五日、大会があり、我がいわきチームが五年ぶりに優勝した。大会前に皆で優勝宣言をして臨んだのであったが、その通り実現できた。そして私は最優秀選手賞に選ばれたのだった。

いわきチームは、三十五歳から四十歳のパワーママが中心のチームである。正直体的には他の強豪チームに比較するとチョット劣る所があるけれど、気力では勝っている。特に気持ちを一つにしてつくり出す集中力は、何処にも負けないチームだと思っている。

スポーツをするのは、何でも好きであるが、特にバレーボールは好きである。スパイクが決まると気持ちスッキリとする。ストレスの解消には一番である。特に、チームの気持ち一つにまとまった時には、勝敗の行方に関わらず、爽快な気持ちになれる。

六月の定期公演は、またオカリナの野口さん

と一緒に舞台を作ります。今回は、奥さんの恵子さんのパーカッションで舞う場面があります。とても楽しみな舞台となります。ジャンベというアフリカの太鼓のリズムに乗って、夕陽の筑波山に向かって万葉集を舞います。ぜひご覧頂けたらと思っております。

行方市にある「三味塚古墳は舞い塚だった」という奇想天外な、異説三味塚古墳の恋物語です。

この風の会の会報も、今月から三年目に入ります。小さな小さな会ですが、ふるさとを賛美する気持ちは、誰にも負けないと思っっているし、創設メンバーは一度も原稿をパスしたことが無いという頑張りチームです。

石の上にも三年。地道に、でも大きな飛躍を目指して頑張ります。私の舞いも、応援してください！

Coffee & Tea Room

《ふらの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦・
蕎麦会席料理のお店です

(ギター文化館通り)

看板娘(犬)の「うらら」ちゃんが皆さんをお迎えいたします。

営業時間 11:30~15:00

16:00~18:00

月・木曜日が定休日です。

またこんな事を書いて：。少し頭おかしんじゃないこの人。人類が滅亡する？ ふざけんのもいい加減にしろ！ そんな話が石岡の発展に何の関係があるって言うの？：と怒られそうだが、チョイ待った。

命あるものは、必ず滅びる。個体のみではなく、種としての寿命もいつかは尽きる。人類に限り、そんなことはあり得ない：と考えるのは、甘すぎる。それは過去の歴史が、明確に証明している。

今、雪豹やジュゴンなど、哺乳類の5分の1が絶滅危惧種に指定されている。その主な原因は、森林伐採や色々な化学物質の垂れ流しなど、人類が犯した環境破壊によるものだ。

縄文時代までは、人類は生存に必要な最小限のものを自然から頂くといい、謙虚な狩猟採集の生活をしていた。それが、定住・農耕を始めた弥生時代以降、今日に至るまで、わずかに二千年数百年そこそこで、自然から資源を、根こそぎ略奪する傲慢な方向へと転換した。そして更に、えたいの知れない化学物質をたんと撒き散らし、弱い生物どころか、愛しき我々の子孫達までもが、住みずらい、汚れた惑星になり果てようとしている。これでは人類そのものが、絶滅危惧種にリストアップされる日も、そう遠くはあるまい。全世界が、経済成長のみに血眼になっている限り、そのシッペ返しは、必ず来る。

『人類は特別の存在だ』などと傲る姿はナン

センス。自然界の単なる一部に過ぎないのだ。

人類は、傲り高ぶって性懲りもなく、愚かな歴史を繰り返してきた。平家物語じゃないが、どんなに栄華を極めた者も、いつかは必ず滅びる。永遠に繁栄した文明なんか、どこにもない。

世界制覇を目指した大王など、史上何人もいた。いずれも領民を泣かせ、ナントカ遺跡を残したのみ。尊敬や崇拜は、取り巻きが、後で勝手に作り上げた伝説に過ぎない。即ち欲張りで、ずる賢くて、謀略に長け、腕力の優れた怪物でなくちゃ「王」には、なれなかつただろう。だが、人民の嘆きを知る慈悲深い人など、王になんかなりやしない。今、威勢のいい人も、明日は露と消え去るのが、世の慣わし。

今、世界の人口は猛烈な勢いで増えている。発展途上国ほど、その傾向は強く、食糧問題、難民問題など、超多難な時代である。

一方日本は、少子化問題で騒いでいるが、それは、短絡的発想で、長期展望の適正人口密度からはほど遠い。こんな狭い国に1億2千万人は、多すぎる。

人口過剰こそ諸悪の根元。全ての争いの源だ。なら日本はどれくらいが適切なのか？ 理想は縄文時代と同じ12万人（現状の1000分の1）。これなら争いもなく、平穏な毎日が訪れるに相違ない。世界人口も600万人なら、領土問題や宗教対立も無くなるだろう。夢を述べても仕様がないが、人類の無秩序な繁殖に、猛省が必要だと言う事。

全哺乳類の中で、人類ほどポピュレーション

（人口）の多い動物はいない。と言うことは、水・食糧・資源不足に環境破壊などで、世の統制が取れず、内部崩壊↓滅亡。これがお決まりのコース。それは歴史が何度も証明している。

カナダの森林狼は、森林伐採や狩猟などにより、鹿など獲物の数が減ると、自動的にペアリング（つがい）の数を減らし、ポピュレーションをセルフコントロールするという。自然界の動物が、きちんと理をわきまえ、自制しているのに、人類はそれができない。食料や資源が有ろうが無かるうが、むやみやたらな過剰繁殖に、ストップがかからない。人間の愚かさだ。

今の地球は『未来人からの預かりもの』と何遍も書いたが、人類は万物の霊長などと、高唱したいのなら、それに見合った実績を残さなければならぬ。「先人の知恵」と後世の子孫から賞賛される歴史的な行動計画・それは、全世界が経済成長至上主義に歯止めをかけ、諸々の人間活動を徐々に減速化する事だ。その軟着陸が政治家の腕の見せ所。英断をもってスピードダウンする事こそ、最重要。今存在する資源は、今生きている人だけのものではない。子孫達にもそれを使う権利があるのだ。資源を節約し、スローライフに低炭素社会の実現・これしかない。もう少しゆとりある、人間らしさを取り戻した奥ゆかしさが、全世界に浸透すべきだ。

自由競争の世界にあつては、当然の結果として格差を生じる。国家間や会社・個人間にも、貧富の差を生じ、戦争や階級闘争・ひいては市井に犯罪が頻発する。経済闘争そのものが、人

生の主目的みたいに世の中が歪められる。先物市場が、食糧にまで手を出し、途上国の庶民生活を混乱させる。まるで人類は、経済という妖怪に追いまくられて逃げ惑う、子羊のようだ。

定向進化には歯止めが効かず、合理性も目的性も越えて突進する傾向がある。孔雀の尾羽根、鹿の角、象牙、鯨の巨大化、そして人類の大脳等。生存に必要な限界を超えて、肥大化する。

魚類など、何万個、卵を産もうが、食物連鎖により、生き残るのは、親の数そこそこ。この現象から連想するのは、人類の最終天敵は、ウイルスなのか？ 極小のウイルスこそ、地上の「王者」なのか？ 人類滅亡後の荒廃した地球。コンクリートも、鉄も、栄華を極めたあらゆる遺跡も、不毛の砂漠と化し跡形も無い。川も湖も涸れ果て：：こんな姿は想像もしたくない。

さて人類の滅亡に関してだが、基本的には、人口過剰による食糧不足や環境破壊が主因。それに加え、異常気象、世界規模の感染症、世界大戦、火山爆発、マグマの大噴出、希ではあるが、確実にやってくる巨大隕石・小惑星の衝突等々。全生物の90%以上も絶滅した事件は、過去何度も繰り返している。それに、頑丈な体格をして、更に大脳容積は原生人類より大きかったネアンデルタール旧人が、3万年前、忽然と姿を消したように、我々にも「種の寿命」が、いつ訪れるかも知れない。地球は「水の惑星・生命の楽園」などとよく言われるが、それは、表向きの笑顔。牙を剥く凶暴な怪物というのも、地球の本質なのである。

【世界規模の感染症として最も怖いのが新型コロナウイルスインフルエンザ。鳥の強毒H5N1型ウイルスが、人から人へ感染するタイプに変異すると、最悪。1918年のスペイン風邪では日本で、2300万人が感染して39万人が死亡した。今、同様の感染があれば、2500万人（5人に1人）が感染し、最大64万人が死亡すると推計。全世界では一億人死亡。日本では、プレパンデミック（大流行前）ワクチンとして2000万人分を備蓄済み。全国民分のワクチンを製造するためには、1年半かかるという。】

人類誕生から、わずか470万年。こんな短期間では、たまたま壊滅的天変地異は少なかつただけの話で、人類に限り滅亡はあり得ないとするのは、単なる妄想に過ぎない。多くの化石人類が、悉くこの地上から姿を消してしまったが、そういう過去の事実を見ても、環境破壊など、自ら種の存続を縮めるような、自殺行為は絶対に避けなければならない。

さて、人類は、目・耳・鼻・舌・触覚など、野生の五官がみんな機能低下し、人工的なものでカバーしなけりや生きていけない。ヒトの退化器官は、犬歯・副乳・体毛など150種に及ぶという。自ら招いた汚染環境に、こんな貧弱な生物が、生き延びられますか？

人類の軟弱化傾向は、各年代とも共通して見られるが、特に近年の若者では甚だしい。周辺問題を自己解決できず、直ぐキレル。又自立せず、いつまでも親に頼るなど、目に余る。まるで、荒海のサメを知らない養殖魚みたいだ。

しかし一方、私と一緒に命を的にして中米で（治安と衛生状態が最悪）働いた海外青年協力隊員など、実に素晴らしい若者達もいる。こういう若者が居る限り、日本の将来も捨てたもんじやないと、日頃、心強く思っている。

さて人類は、「幼形成熟」の変形進化に翻弄され、元々、進化論的には失敗作なのである。ターザンのようなスーパーマンには、ほど遠い。もし、過去に何度もあった強烈な天変地異に再び襲われたなら、ゴキブリは生き残っても、人類は生き残れない。だが無謀にも、世界制覇を目指した、不心得者は、古より多数存在した。愚かな歴史と私が言いたいのは、そのような、ならず者によって繰り返された数々の史実のことである。しかし、以前にも書いたが、縄張り争いこそ、生き物の本性であり、己を主張して生き抜くことこそ、DNAに刻まれた、生物の本質なのである。世捨て人まがいの小生から見れば、政財界の小利口な者共が、日夜、権力闘争に明け暮れている姿と、山奥の雄鹿共が、角付き合わず姿と、どこが違う？

さて、そろそろ本論。誰かが人類のDNAを、いじくっている。継ぎ接（は）ぎしたり、こねくり回したりしたに、相違ない。

そうでなければ、わずか数千万年で（初期人類は、100万年も石斧の姿を変えぬ超スローペースの進化ぶり）これだけ道具や言葉が急速に発達する訳がない。まるで「毒饅頭」みたいに脳を膨らませ、殺人・戦争など、こんなに凶

暴性を増すのはあまりにも異常だ。個人ではなく、全人類の「大脳進化の方向性」が問題。そして見境もなく、こんなに人口爆発するとはなしたることか。進化の途中まで一緒だった類人猿は、こんなバカ繁殖はしていない。即ち、脳容積は、時間と平行して、なだらかに増えたものではなく、ある時から急に膨張に転じたのだ。

この毒饅頭の威力たるや、ただものではない。獐猛性の強化とバカ繁殖の無秩序。世界の惨劇を振り返って見ればよくわかる。数え切れないほどの戦乱・虐殺など目を覆いたくなる。インカ帝国の壊滅や、アウシュヴィッツの惨劇を起こしたのは誰だ？ 更に原爆投下・枯れ葉作戦などの卑劣な行為。これらは人間の皮をかぶった鬼畜の行為だ。もし当時の関係者に、理性や人類愛のかけらでも有ったなら、あれほど卑劣な行為はしなかったはず。その意志決定をしたのは、この暴走する毒饅頭である。

人類の大脳は、原始的な旧脳の支配に従っていれば問題はなかった。所が自由になった手は石器の進化をもたらし、火の使用が始まり、栄養が改善されると、大脳皮質が急速に増大したため、碌でもないことを創造し、人が人を飼育して家畜化し、豊富なエサにより、無制限繁殖する悲劇へと発展した。しかし悲しいかなその毒饅頭は、今なお際限もなく膨張を続けている。

故に、宇宙人がきつと何かを企んで、穏やかだった人類の脳に、細工を施したに違いない。このまま膨張を続けたら、蛸入道どころか、超仮分数のモンスターになってしまう。

【人類の世界三大発明は、①火興し②産業革命③相対性原理の発見：とも言われる。火興しについては、ある科学者は実験で生木をどんなにこすりつけても、発火はしなかったと述べている。落雷、火山噴火などが、人類が自然から手に入れた火種であろう。人類が頻りに火を用い、日常の食べ物に、火を通すようになったのは、およそ4000年前からと言われる。その直後から急に人類の大脳容積が増大に転じた。大脳は静止中の筋肉の16倍ものカロリーを消費する。栄養改善即ち、肉など美食が、人類の大脳を肥大させたと言われる。】

さて一方、宇宙には1000億個の銀河系が存在する。そして各銀河系にはそれぞれ、ほぼ1000億個の恒星がある。計算上わが天の川銀河系だけでも、恒星に惑星があり、しかも水が、三態（気体・液体・固体）をなし、更に知的生物が存在し得る惑星は、100万個もある筈という。現在すでにわが太陽系外で、270個の惑星が発見されている。従って全宇宙で、この地球のみが特別の存在とはいえず、他にも同じような惑星は、いくらでもあり得るといえる。

【我々の太陽は、わが天の川銀河の「射手座」の方向の中心から、3万光年離れた端の方に存在し、秒速270km、2億年の周期で公転している。そしてわが地球は太陽から1億4960万kmの所に、第3惑星として存在する。その距離・構成元素・質量・存在年数等が、火球を冷却し、海水の量・組成・温度を決め、空気の種類・温度などを支配し、宇宙線や放射線などが

ある限界以下に達し、初めて海底で生命が誕生し、進化へとつながった。最初の生物は、嫌気性菌であったが、8億年ぐら以後に酸素という猛毒ガスが現れると、大多分の嫌気性菌は死滅したが、チャッカリ酸素を利用するものが現れる。それが好気性菌であり、多細胞生物へと発展して、後に大多数の生物の、祖先となる】

さて、地球外に、知的生命を持つと思われる惑星が、100万個もあるのなら、当然、その中には、地球より遙かに進んだ文明を持つ惑星も、多数あり得るであろう。地球より100万年や1000万年ぐらいい文明が先行した異星人がいても、決しておかしくない。

とすると、彼らの中には、将来の移住先として、十分調査をし、この地球に目を付けるのも当然。調査隊は、早速行動開始。多分この星では、人類とやらが、いずれ主導権を握りそうだ。

ならば今のうちに、無制限繁殖など内部崩壊を起こすよう、チョイと遺伝子をいじくり、人類こそ、自らの星を滅ぼす、モンスターにしてやれ！ として人口過剰で、殺人や戦争など大喧嘩ばかりして、セルフコントロールできない動物に進化させてやれ！ やっかいな動物が滅び、更地になったら、再び訪れ、ゆつくりとこの星を、占領してやろう！……と考え、30万年ほど前に、術を施し、自分達は冬眠状態に切り替え、UFOを自動操縦にセットして、意気揚々と、数万光年離れた自分達の星に、帰って行った。……とも考えられる。

古よりの教訓・『治に居て、乱を忘れず』

早春

伊東弓子

・菜の花につもれて堂のたつ

・子等が 群がつていく

・言葉 間に合わず一日悲し

・静かな道沿いに花のたむけてある

・春を待つ草の田水の田土の田

・鼻水と風と波の音ばかり

・田のさざ波に陽が三つとも四つとも

・この風にたえてただ待つ月

・杉のこげ茶も緑濃く衣替え

・はこべの花も親草となる

・軍手の中でしびれる指

・前に行く男 田んぼの鳥に恋えてカアカア

鬼の仕業

打田昇二

律令制に基づく正史「六国史(りつこくし)」の一つ「日本三代実録」は、第五十六代・清和天皇から光孝天皇までを収録した勅撰の歴史書である。選者の一人が学問の神様になった菅原道真公だと言うので極めて謹厳実直な内容だと思っていたら、妖艶で恐ろしい話の一つ、二百五十字ほどの漢字で載っている。

この本が編纂されたのは次の宇多天皇から醍醐天皇の時代にかけてであり、道真公はその時代に最も活躍しながら、政敵・藤原時平の讒言により九州・大宰府に流されてしまった。

実は、ライバルを消した直後に殆ど出来上がっていた「日本三代実録」を、さも自分一人が作ったように奏上したのは藤原時平だった。

道真公が怨みを呑んだまま九州で亡くなると「ふるさと“風”第二十二号・神器と大仏」でも触れたように、イジメに心当たりのある連中が天変地異を「祟りだ」と怖れたのである。

日本三代実録に書かれた話は二十年ほど前のことで道真公にはアリバイがあるけれども、藤原時平らの野心を察知して「祟りの予告」として書き留めたとも考えられないことはない。

その証拠に、事件が起きたのは仁和三年(877)八月十七日のことであるが、その何日も前から大きな地震があったり津波で死者が出たり、羽蟻の大群が発生したり怪しいことが続きその原因探求に陰陽師が残業をしていた。

その日、亥の刻(夜十時過ぎ)に武徳殿の東

の松原を三人の美女が歩いていった。御所の構内だから三人は宮仕えの女房たちであろう。何の用事か、外出先から戻って殷富門から右兵衛府と右近衛府の前を内裏に向かっていった。

史料に採録された大内裏の図をみるとその場所に建造物は無い。数百メートル四方に亘って小ぶりの松が植えられた松原で、淋しくはないが掃部(かもん)寮、内蔵(くら)寮、内膳司など役所の灯が消えれば暗闇になる。

丁度、その夜は少し月が出ていた。警備の厳重な御所内だから強盗などの心配はない。三人の女たちは身を寄せあいながらも初秋の夜風を心地よく頬に受けて歩いていった。

行く手に一本の枝ぶりの良い松があり、木の下に一人の男が佇んでいた。夜目にも眉目秀麗な若者のようで端整な身なりをしている。月明かりが男の顔を照らした。御所勤めの女たちが見かけない顔だが、余りの美しさに三人は息を呑んで思わず立ち止まった。二人は恥ずかしさに目を逸らし、一人は真直ぐに若者を見続けた。

「もし…」その女に若者が声をかけた。

「お話したいことがあります」

「どのようなお話でしょうか」自分だけが認められたと錯覚した女が答えた。若者はスツと近寄って女の手を取った。連れの二人は悔しいとは思ったが、気を利かせたつもりで、わざと足早にその場を離れた。

その後、どうなったか、下手に解説すると誤解を招くので忠実に記述すると…

「…手を携えて相語り婦人は精感し共に樹下に

依る。数剋之間、音語聞こえず、驚き恠み是を見る。其婦人手足折落、地に在り。其の身首無し。右兵衛、右衛門陣に宿(直)せし侍は、是を聞き行きてその屍有りやと見れど(探せど)忽然と消えて無し」

サスペンス劇場「死体(手足を除き)無き殺人事件」発生である。結局、現在の警察なら時効まで捜査して「迷宮入り」になるのだろうか、昔の便利さで「これは鬼の仕業であろう」ということになった。しかも怪異現象はそれだけで終らなかつたのである。

なにしろ御所内の、それも内裏の近くで起きた猟奇殺人事件である。警備の人数が増やされ、何の役にも立たないが陰陽師と僧侶とが共同で太政官の隣にある八省院に宿直した。その夜のことである。何となく辺りが騒がしい気配に怯えて誰とも無く宿直の全員が表へ飛び出した。調べたが何の異常も無く、誰もが何で飛び出したのか全く理由が分らなかつた。

この事件について三代実録の書き出しは「一七日戊午今夜亥時或人告行人云」となっている。この事件の第一発見者が別に居た」とも「誰かの話が記録された」とも取れるが、学者は後の説を主張しているようである。

犯罪が凶悪化している現代は美人の奥さんが平気で旦那を分解したりするが、当時は怪しい事件は全て鬼の仕業にしていた。(鬼が怒るかも知れないが)それにしても仁和三年八月のバラバラ事件がなぜ国の正史に記録されたのか。

三代実録では更に「この月、宮中及び京師(都)

にて此の如き不根の妖語(根も葉もないような怪しい噂話)三十六種人口に在り。委しく載せる能わず」と言っている。当時の世相は何となく国民が不安を抱えていた。一ヶ月に三十六回も怪しいことが有った(毎日のように怪事件が起こつていた)というのは普通ではない。

偶然とは思ふのだが、その時の天皇は第五十八代の光孝天皇で、丁度「御所内松原のバラバラ殺人事件」が起こつた頃に病死されている。通常の場合、天皇・法皇・上皇などの死は「薨去」「崩御」「薨ず」「崩ず」と記録される。この天皇だけは崩御の直前に「聖体乖豫なり」という記述がある。魂だけが肉体から離れて何処かへ行ってしまったのだと私は勝手に解釈した。繰り返して言うが、事件とは関係が無い(であろう:)と思いたい。それと言うのも、此の天皇が誠に気の毒な方だったからである

石岡ゆかりの平氏一門は第五十代・桓武天皇の子孫で「桓武平氏」を称し、八幡太郎義家や源頼朝などの源氏一門は第五十六代・清和天皇の後胤を称している。つまり「清和源氏」であるが、本当は次の代の「陽成源氏」なのだという説も流布している。陽成天皇の評判が良くないから先祖となる人物を繰り上げたらしい。

清和天皇の強い意思により、九歳で即位した陽成天皇は精神に障害を持つと言われて色々な史書に奇行が記されている。母親は在原業平らとの艶聞で知られた藤原高子、摂政として母の兄・基経(伯父・良房の養子となる。時平の父)が補佐していたのだが、十五歳で元服すると陽

成天皇は自分の政治を主張したらしい。

そうなる。「真ともな意志の強い人物」ということになるのだが:ともかく、天皇が政治に介入すると藤原氏は困る。嫌がらせで藤原基経は何度も辞表を出しては慰留されている。そのうちに宮中で大事件が起こつた。

陽成天皇の乳母は従五位下の官位を持つ紀全子だった。その女性と散位(さんみ)位階を持つが役職の無い公家)源蔭(みなもとのかげ)嵯峨天皇系の源氏)の間に生まれた源益(みなもとのます)が急死したのである。死因は頭部及び顔面の強打、つまり誰かに殴り殺された。被害者が天皇の側近(乳母の子)で、他に誰も居なかつたとなると犯人は確定してしまうのだが、それでは日本の歴史が自慢出来なくなるから三代実録にも「源朝臣蔭之男益侍殿上卒然被格殺:」と記録して犯人を示してない。元慶六年(882)十一月十日のことである。

宮中では直ちに諸行事を中止した。それから一週間ほど経つと、今度は天皇が内緒で飼っていた馬に乗って内裏の中を走り回つた。これには摂政の藤原基経が怒って、直ぐ馬小屋を壊してしまつた。そうした奇行が多いと伝えられているけれども、この天皇が詠んだ歌が:「筑波根の峯より落つるみなな川恋ぞ積りて淵となりぬる」

陽成天皇は清和天皇の従姉妹に当る年上の皇女に恋をして此の歌を詠んだとか、叶えられる恋では無く、皇女のほうもあらぬ噂を立てられて気鬱から早死にしまつた。無責任な噂を

流した御殿女中たちは鬼に殺されたという。

茨城県に住む者としては、身量でこの歌に見る限り、型破りのところはあつたかも知れないが陽成天皇狂気説に疑問を持たないではない。撰政の藤原基経が、言う事を聞かない天皇を追い落とし疑いもある。野史では殺人事件の後、宮中の座敷牢に監禁されている。

元慶八年二月四日、十七歳の天皇は敵の裏をかくように自筆の退職願を撰政に郵送して「ヤメタ」と出家してしまった。幾ら憎い天皇でも急に家出されては困る。閣僚たちは大急ぎで天皇の後釜を見つけ出さねばならなかった。

陽成天皇の父親である清和天皇自身も、母親の力関係で利発な兄を差し置いて九歳で即位させられたから、敵が多かった。藤原氏と旧来の勢力との対立からゴタゴタが絶えず、二十七歳で坊さんになって余生を送っている。此の人も犠牲者だったのかも知れない。清和天皇は三十歳で亡くなっているが、さすがに陽成天皇は鬼も呆れるほどシブトク、退位してから多勢の子を儲け八十過ぎまで生き抜いている。

運悪く見つけ出された光孝天皇は清和天皇の叔父に当たる。最初から皇位継承の枠外に置かれて、本人もそのような野心も算段もなく質素儉約を旨とし、謙虚に胸を張って生きるという二宮金次郎みたいな人で、間も無く定年を迎える頃に突然、役人が来て捕まえられ有無を言わず天皇にされてしまった。

そういう人だから、藤原氏が専制政治を行い、光孝天皇は「これで良いのか？」と悩み続け、

その上に陽成天皇に横恋慕された「ミス筑波峯」がこの人の娘だったから悩みが尽きない。

三年ほどで死の床に就くような状態になってしまった。光孝天皇の具合が悪くなった途端に怪奇な現象が皇居内に出現した。まず内裏の庭に幾千万の数知れぬ蛙が集まって集会を開いた。

その蛙がスッポンのような形で汚い五色の模様があり、悲しい声で鳴き続けながら御所内に入り込もうとする。衛士たちがこれを掻き集め

て捨てても間に合わない。すると、今度は御所の床下から何匹も大蛇が現れて蛙を呑もうとしたのだが、逆に蛙に呑まれてしまう。蛇連隊は全滅し、蛙が不気味で嫌らしい鳴き声の勝鬨をあげて堂々と門から外へ出て行った。

また古墳の埴輪に似た数十人の武士の亡霊が御所の庭に忽然と現れ、警護の武士が是を射ても一瞬に消えては現れ、弓の下手を嘲笑った。これらの怪奇現象は、どうも先代の陽成天皇があれこれと悪さをした報いであろうと噂された

ギター文化館

2008 CONCERT SERIES

The 15th anniversary

- 6月 8日 **アリエール・アッセンボーン**
歌とギターのコンサート
- 6月22日 **高橋竹童 津軽三味線のひびき**
- 7月 6日 **吉川二郎 フラメンコ・コンサート**
- 7月20日 **SONOROSA ブラジリアン**
ミュージック
- 8月 3日 **佐藤純一 ギターリサイタル**
- 8月31日 **北川 翔 パラライカリサイタル**
- 9月 7日 **チャン・デゴン ギターリサイタル**
- 9月28日 **福田進一 ギターリサイタル**

ギター文化館も開設して今年で15年になります。
魅力タップリの大型企画で皆様のご来場をお待ちいたします。

第2回フラメンコギターの祭典

9月20日・21日(土・日)

ギター文化館

〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35

0299 - 46 - 2457

FAX0299 - 46 - 2628

が正直に言う訳にはゆかず、他の不思議な事件と共に無実の罪で鬼が泣き寝入りをした。

大雑把に「鬼」として扱われたのは、怪奇現象を起こした人の怨念などが主力であろうけれども、古代から抵抗勢力として扱われた蝦夷などの先住民族や漂流してきた異国人、攻めてきた捕虜などの「疎外された民」も含まれた。正体のバレないうちは、盗賊も気安く隠れ蓑として「鬼」の名目を使っていた。

日本の正史ではないが、江戸時代中期に編纂された「前々太平記」という野史には鎌倉時代の「元寇」より三百年も前の寛平六年（894）9月に蒙古の軍勢が日本へ襲来した際の詳しい記事がある。歴史年表にも「新羅侵攻」の記録があるから、まんざら嘘でもなさそうである。当時、未だジンギスカンの帝国は出来ておらずウイグルとかキルギスの騎馬民族が、唐の国の衰退に乗じて朝鮮半島の新羅勢と一緒に海を渡って対馬に押し寄せたのである。

知らせを聞いた大宰府長官・文室善友（ぶんやのよしとも）は一万数千の兵を五十艘の船に乗せて対馬に渡り、銀山などの洞穴で敵を待ち伏せた。一方、家臣の秋山某に作戦を授けて、対馬には誰も居ないように見せかけ、新羅の偵察先遣隊五十余人を上陸させてから討った。

沖に居て上陸しなかった新羅軍が八十万とも九十万とも言われる敵の本隊に知らせることを予想した文室善友は、偽の手紙で日本軍が対馬に集結するように見せかけ、島中の人馬、財産、物資などを壱岐に疎開させ、対馬での決戦

を覚悟して山中に兵を隠した。敵の大軍は船で対馬を取り囲み様子を見ても人の気配が無い。

上陸して民家一戸ずつを探し始めたが、誰も居ないので山中に隠れたと考えて押しかけた。何しろ大軍が一度に上陸したので島中が混雑している。先に山へ入って来た兵士が落とす穴に落ちて、後から押されて戻れない。その内に風が出てきた。日本軍は洞穴から一斉に矢を射かけ、各所に火を付けた。島を吹き抜ける風で火は勢い良く、混乱した敵の大軍は壊滅した。

日本軍は間道を避難して入江に隠した船で対馬を離れ、沖に居た敵の船を急襲した。敵船に積み込まれていた金銀財宝、武器、食糧は日本軍に押収された。大陸の騎馬民族がモンゴル帝国として強大化し、再び対馬に侵攻してくるのは文永6年（1269）である。その時の執権・北条時宗のことは知られているが、九世紀末の異敵撃退に尽力した人々のことは無視された。

教科書的日本史では、菅原道真が自ら最後の遣唐使になった経験から、唐の国の内乱と航海の危険とを指摘して遣唐使の廃止を宇多天皇に進言したことになっている。その時期は、対馬が外敵に襲われた時期である。唐の国の没落や朝鮮半島の新羅強大化など国際情勢が既に遣唐使などの時代ではなくなっていて、壱岐対馬を含む九州の防衛が重要になっていた。

にもかかわらず、日本の政治は藤原一族が権力増大だけしか考えていない。恐らく菅原道真公は、その辺りのことを鋭く指摘したのではないか：大宰府を中心とする西辺の護りを強調し

たのかも知れない。相手は国や国民のことなど眼中には無い（今の政治も似てはいるが）連中である。藤原一族は次第にうるさがり「それならば、お前が行け！」と道真公を九州大宰府へ飛ばしてしまった。私はそう睨んでいる。

何しろ内閣の副総理から防衛省九州支部の副部長ぐらいに落とされて、半分は罪人扱いなので腹も立つ。その怨念が高じて健康を損ね二年と一ヶ月で病死してしまった。

さてそうなると鬼の出番である。謹厳実直な教育者の菅原道真公が暴れ回る訳にはいかないから、下請けの「必殺仕事人」が鬼とか怨霊とか疫病神を総動員して、都で踏ん返り返っている悪い連中に脅しをかけ、崇りを為すのである。

古今東西を問わず、権力闘争はどのような場合でも苛烈を極めるから、罪無くして消される者も多い。気の毒な亡霊の為には「怨霊」が必要かも知れないと思うときがある。明治維新で「仇討ち」が禁止されてから「怨念による祟り」も法的な後ろ楯を失ったようなもので、うっかり化けて出ても「違反だよ」とか「時効だよ」と相手にされない心配がある。出来れば現代でも「鬼」が健在で悪い奴を徹底的に懲らしめてくれると世の中が少しは良くなるのでは：

一方で、石岡にも「龍神山と茨城童子」の伝説が伝わるが、狡猾い盗賊などは「鬼」の所為にして荒稼ぎをしていたようである。取り締まる役人も正体が分からない鬼では手が出せないからそれを利用したのであるが、武士でも鬼など恐れない元氣者が出てくると盗賊にも都合

が悪くなってくる。茨城童子の話は筋書きが単純で源頼光の強さだけを強調している。源氏の点数稼ぎがでっ上げた話であろう。

菅原道真公の崇りとされてしまった天変地異が一段落した延喜六年(906)の九月末に、伊勢の国司から都の検非違使(けびいし)庁あて早馬で知らせが来た。報告書には「鈴鹿山中に盗賊が集まっていたので、伊勢国府の軍勢をもって残らず退治し、幹部十六名を捕えた」と手柄話がかかれていたのだが、検非違使が安心して手紙を仕舞おうとすると、まだ続きがあって「：併しながら」と一番に肝心なことが最後に長々と綴られていた。

それによれば「盗賊の総大将は、その姿形が鬼のようで神変万化の術を使い容易に捕えることが出来ない。察するところ百年前、第五十一代・平城(へいぜい)天皇の御代に起こった騒動により、坂上田村麻呂に退治された靈魂どもが残っていて、それが盗賊の親分に付いているのではないかと思われる。これでは神様の力をお借りしなければ退治できない。今後、どのようなことが起こるか分らない」とあった。

検非違使庁は伊勢国府の言い訳に呆れたが、文面は更に「戦争ならば伊勢の国でもある程度は対応できる。しかしこれは怪奇現象なので管轄外であるから朝廷の御沙汰を仰ぐ。もし坂上田村麻呂のような大将を差し向けて下さるならば一致協力して退治できるのでは」と皮肉とも厭味とも取れることを申し出ている。

平城天皇時代の騒動というのは一般に「藤原

ギター文化館発：ことば座第八回定期公演

「常世の国の恋物語百」

第15話「風の姿(異説三味塚古墳)」

6月15日(日曜日) 13:30会場 14:00開演

第15話「風の姿(異説三味塚古墳)」

「三味塚古墳は、古墳ではなく、舞い塚だった!!」

昔、黒坂命と建借間命が茨城と行方の両地から挟み討つ様に進攻し、霞ヶ浦湖岸とその周辺の森に暮らす原住民を無差別大量殺戮を行なった。園部川河口に暮らす舞の民と呼ばれる人々を進攻の手から救ったのは、小型の野生馬を能く使う、奈女比古という若者であった。

ことば座6月公演は、行方市の三味塚古墳をモチーフに、近藤治平が大胆な発想の基に書下ろした異説の舞い物語。ふるさとへの熱い想いを、万葉集の恋歌を引用しながら夕景の霞ヶ浦に流れる風の姿として、小林幸枝の朗読舞と野口喜広のオカリナ、そして兼平ちえこのことば絵で謳いあげていきます。

前売チケットのご予約は、ギター文化館(Tel.0299-46-2457)へ。

ことば座事務局 〒315-0013 茨城県石岡市府中5-1-35

Tel.0299-24-2063 Fax 0299-23-0150

薬子の「変」と呼ばれる事件で、桓武天皇の第一皇子として十二歳で皇太子となった安殿(あて)親王こと平城天皇が、事もあるうに側室となる娘の母親(人妻・藤原薬子)との愛欲に溺れて国政を乱し、三年足らずで弟の嵯峨天皇に譲位させられた(関係者が坂上田村麻呂に討たれた)宮中の不祥事なのである。

この薬子(くすこ)は、桓武天皇の側近で政敵に暗殺された藤原継縄の子であるが、同族の夫との間に生まれた娘が平城天皇の側室に上が

る際にあれこれ心配だからと付き添いで宮中に入り、そのまま居座って自分が天皇の側室になったという実に分りやすい女性である。さすがに桓武天皇はこの不倫を許さなかったが、大同元年(806)に死んでしまったから、残された噂の二人は元に戻ってニッコリ笑った。

さて、伊勢国司から突き付けられた難題に対処するため、政府は緊急の安全保障会議を招集したのだが、遊ぶこと以外には頭が回らない公家たちに良い知恵が出る訳も無く「盗賊退治の

大将には誰が相応しいであろうか「その人物をどうやって見分けたらよいか」「相手が鬼神と思われるので知恵の回る人が良い」「これは功德のある僧侶の出番ではないか」などなど、ろくな意見も出ずに時間ばかりが過ぎていった。

そうした時に掃部寮から使いが来た。此の役所は儀式の際の宮殿の掃除とか式場の設備を担当し、併せて畳の張替え、簾の補修などが担当である。「重要な会議に補修屋の出る幕はない！」と言って追い返そうとしたのだが使いの男が黙って書付を突き出した。

それには「昨夜の深更に陽明門の前を何やら怒鳴りながら歩いている者が居た。数回に亘って同じような言葉を言うので書き留めた。怪しんで追いかけたのだが正体は不明だった。聞き書きだから其の文字は分らない」とあり、別行に「れいろくさんのたうじんはてうやがしもべきぐわんよ」と書かれていた。

陽明門は、この稿の最初に登場した殷富門の反対側、つまり左兵衛府と左近衛府が置かれた御所の東門で、内裏には一番近い。届けてきた掃部寮は殷富門側にあるから、陽明門の出来事は分らない筈である。

左兵衛府か左近衛府の役人が怪しい叫び声を聞いて書き留めた。周りに異常は無いから本来は検非違使庁に通報するのが筋だが、今の役所と同じで縄張り根性が強い。厄介なことには検非違使庁は始め左衛門府に置かれていた。

衛門府・兵衛府・近衛府は同じ様に宮中の警衛と天皇行幸時の警護が仕事で、守備範囲だけ

が分かれていたから競争意識がある。面倒なので一番暇そうな掃部寮に届けを押し付けたのである。掃部（かもん）は「かにもり」が訛った呼び名とされ、蟹のように横這いで天皇陵を掃除する（御陵のお守り）が本務だから、神がかった仕事が担当と言えないことも無い。

諸卿と呼ばれる身分も給料も高い公家たちが呪文のような書付を前にして暫く唸っていたが、

やがて「れいろくさん」は「鈴鹿山」ではないか！と一人が気付いた。そうすると「たうじん」は「盗人」、「てうや」は「長野」で、「しもべ」が「下部（家来）」だとすれば、伊賀に近い長野荘の荘司の家来ということになる。最後の「きぐわん」は「鬼丸」と推定して、取り敢えず伊勢の国から長野荘司を呼び出した。

検非違使庁に出頭した長野荘司は、役人から「そなたの家臣に鬼丸という者が居たか？」と聞かれて「実は……」と語り出しのが何とも不思議でややこしい話であった。

荘司の語るところによれば、鬼丸は伊勢国布引山麓の村に齒が生えて生まれ、三日にして飯を食い、凡そ一ヶ月にて相貌四、五歳の小児の如く、三か月で歩行し、一年で言葉を発した。七歳では大人の精強な弓を引き、山野を走るごとく虎狼の如く、九歳にして他人に奉公したが力は十人力にて背丈は五尺に余ると言われた。

しかし飯を食らうこと日に五升、酒を飲むこと一夜に一斗、相撲力技に勝者無く、其の身軽捷にして、兵法を知り、十六歳にして伊勢朝熊

（いせあさま―伊勢神宮の近くにある山・金剛証寺がある）の山賊三十人を従え、十八歳にて近海の海賊船十余艘を奪った。

山野の獣を捕えることも易く狩人も及ばず、鯨を突き海獣を得ることも漁師の及ばぬところ、エンゲル係数は高いが正に稀代の勇士也と人々が称えた。そこで長野荘司は得がたき人材よと家臣にして出来るだけの扶持を与えていた。

ところが怪力の鬼丸は普通の勤めに飽き足らない。勤務の合間に山へ出かけては、ウロウロしていた山賊共を手なづけ従わせ、手下にして、何時の間にか「鬼」と呼ばれる山賊の総大将として鈴鹿山中の闇の世界に君臨していた。

長野荘司には、子宝に恵まれず鈴鹿権現に祈願して授かった申し子の娘があり、名も「鈴鹿」として慈しんでいた。鬼丸を信頼していた長野荘司は、ある時、鈴鹿姫の外出時に鬼丸を護衛につけた。その日、鬼丸は鈴鹿姫を奪い山中に逃亡したのである。知らせを受けた荘司夫妻は果然として為すすべを知らなかった。

ところが、鈴鹿姫を担いで鈴鹿山頂を目指す鬼丸の前に忽然として一人の美女が現れ：「汝は鬼丸であろう。我こそ誠の鈴鹿姫なり。慌てて攫い、わらわと侍女とを取り違えるこそ可笑しけれ。そなたが背負いし者は侍女の星野なるぞ。良く見よ。かくのごとくに命がけで女子を奪うならば、誠の鈴鹿であるわらわを連れ行くが良からう。その侍女の父母の嘆き悲しみは同じであるぞ……」と諭すように言った。

鬼丸は二人の鈴鹿姫を岩の上に並べて見比べ

てみた。全く同じ顔立ちで甲乙付け難いが先入観があるから、言われてみれば後から湧いて出た姫のほうが少しだけ容姿端麗に思えてきた。

鬼丸は急ぎ鈴鹿姫を交換すると、手下のいる山奥に逃げ込んだ。残された侍女こと本物の鈴鹿姫は何が何やら分らず、恐怖と安堵と心細さで暫くは呆然と立たされた岩の上にいた。

そこへ程なく年老いた樵夫（きこり）が山道を通りかかって岩の上の姫に気付き、近寄って「これは如何なることでしょうか？貴方様はどなたですか…」と聞いてくれた。

鈴鹿姫が事情を話して「…急ぎ里に下り我が屋敷へ戻りたいのですが道が分からず足元もおぼつきません…」と言えば、その老人が急に厳かな口調で「それは権現、もとより女神のお助けであろう。そなたの身代わりになってくださったのである」と、手にした杖を姫に授けた。

「案ずることは無い。私が戻る道を教えよう。この杖を突けば道に迷わず、足も疲れずに里まで行ける。容易に歩むことの出来る杖である」

其の言葉に安堵した姫が深く頭を下げた僅かの間に老人の姿が消え、山の木霊とも思える声で「我は鈴鹿の末社・白鹿（しろしか）社の神にして神勅により、そなたを救いしものなり。この後もそなたを守るべし。鬼丸が事は公となるよう、我が都に行き内裏に告げん。神力を加えて退治すべし」と告げられた。

鈴鹿姫は神社の方角が分らないので四方八方に頭を下げてから岨道を一步踏み出すと、杖が自然に道を選び、足が勝手に動いて僅かの間に

に里へ戻る事が出来た。

鬼丸のほうは折角、選んできた鈴鹿姫がいつの間にか消えて居なくなり、何となく夢見心地なので「さては狐か狸に化かされたか！」と悔しがったが後の祭り、村人の噂を聞いて鈴鹿権現と白鹿神が姫を助けたことに気付いた。「さては謀られたか！」と無謀にも神社に押しかけて神官を追い出し、自分の家のようにしていた。

一方、伊勢国司は鈴鹿姫の誘拐事件から凶悪な山賊の所在を知り、総力を挙げて討伐作戦を展開した。その結果、幹部とおぼしき十六名を捕えたのだが、その山賊たちから鬼丸の怪力を知り、それが鈴鹿神社を占領していることに恐れをなし、怪我人でも出では損だと検非違使庁へ知らせたのだった。

「陽明門の周りで怒鳴っていた」のが鈴鹿の神様らしいと分って、気強くなった検非違使はまず、飼主だった長野莊司に手勢百余名を率いて怪物こと鬼丸を退治するように命じ、伊勢国府の軍勢二千には残りの山賊を掃討させることにした。結局、検非違使は戦場へ行くだけで何もしないことになるが、政府公認の作戦になったから、伊勢の兵士も手柄を立てれば恩賞を貰えるので、少しやる気が出てきた。

多くの軍勢が鈴鹿山を取り囲んで山狩りを開始したが、前の作戦で大方の賊は捕まっているから収穫は少ない。伊勢国司は自ら鈴鹿権現の前に布陣して一斉に矢を放つと、鬼の面を着けた賊が二人、慌てて面を外し両手を挙げて出てきた。国司は射るのを止めさせ、二人を捕え

て

「我は伊勢の国司である。正直に白状すれば命は助けよう」と言う素直に従って、残る鬼丸は社殿の奥に隠れていることを漏らした。

尚も聞き質すと、社殿の奥には抜け穴があり谷底に通じていることが分ったので、国司は長野莊司に出口へ回るように命じた。社殿は高い峯にあつて、鬼丸は扉を細めに開けて強力な弓で射てくる。さすがに十人力の大男である。

国司は弓の名手に扉を射て閉じさせ、一斉に矢を神殿に射かけた。鬼丸は諦めて抜け穴へ逃れた。鬼丸の怪力を知る莊司は網を何枚も用意して洞穴から這い出た鬼丸に打ち被せ、手足の自由を奪ってから国司の前に引き据えた。勇士としては惜しいが、既に賊となつた以上は更に悪事を重ねるであろうと、鬼丸は網で絡まれたまま矛で突かれ、さしも頑強な命を落とした。

この話は正史には載っていない。記録として「延喜六年九月二十日に鈴鹿山の群盗十六名が誅殺された」とある。この十六名は総員ではない筈で、三十年程のちの丁度、平将門の時代に瀬戸内海で海賊が集団で自首してきた数は二千五百余人だった。伊勢へも通じる東海道の要衝・鈴鹿山は道中往來の人数も多かったから、十人や二十人で隊商を襲つても失敗する。

今昔物語集に「都の商人が馬百頭に小人数の供で（鈴鹿峠を越えて）伊勢まで何度も荷を運んでも山賊には遭わなかった」という話がある。暫くしてこの商人は八十人の山賊に襲われたがミツバチの集団が賊を刺して護ってくれた。

少数の賊では無理なことの証明だが、海賊や山賊が横行するこの時代の事件では殆どが賊の数を記録していない。鬼丸の事件だけを「十六名の罪を明らかにして誅殺した」としている。これは怪奇な事件だったからであろう。

鬼丸の例のように、手ごわいもの、想像を超えるもの、正体不明のものなどを一括して「鬼」とすれば「一般の者には手が出せない存在」に分類されて、これを扱うのは武士の中でも限られた存在になる。特権の設定である。

朝廷を牛耳る公家の風下に置かれた武士たちが少し無理して正体不明の「鬼」に挑戦し成功すれば、忽ち名を上げ出世の糸口がつかめる。代表的な人物が部下に四天王を従えた「らいこう」こと源頼光であり、もう少しで遠く石岡の龍神山まで出張させられるところだった。

鬼のうち「人の怨念」に分類されるのは菅原道真公のように陰謀で貶められた者に対する勝者側の「自責の念」にあるらしい。歴史の大部分は「あくどいことをした勝者の反省」で成り立つようで、そのために後から造られた神社とか寺院、とって付けたような贈位も多い。「国家国民の為」などと嘯いて、いい加減な政治を繰り返す奴の始末は何処の鬼に依頼したらよいのであろうか。ふと思うことがある。

「ふるさと風の会」会員募集中!!

ふるさと風の会も、6月号から三年目となりました。

ふるさと風の会では、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化を真面目に表現し、ふるさと自慢をしたいと考える方々の、入会を

お待ちしております。

会の集まりは、月初に会報作りを兼ねた懇親会と月一回の雑談：勉強会。雑談：勉強会は、石岡市中町商店街の和菓子店「なか川」の二階をお借りして集まっております。

入会に関するお問い合わせは、下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平ちえこ 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ことば座「風の塾」絵と一行文教室

講師：兼平ちえこ・白井啓治

言葉とは、心を口に茂らせること。心とは真実。口とは真実を表現する全ての手段のこと。ふるさと風の会に刷いて、暮らしの中の発見を一行の言葉に落とす。一切の形式を忘れ、表現の基本である「自由自在」を大切に考え、筆の遊びを楽しむ教室です。絵の講師、兼平ちえこは、ふるさと風の会会員で、ことば座の舞台装飾を担当しています。絵や文に抱いている固定観念を取り払って、自分を楽しむことに一生懸命の教室には、何時も笑いが絶えません。「老いても青春」を主張し、「常世の国の恋物語百」に挑戦する脚本家：白井啓治の「ちゃんと恋をしてる？」の話の下、箸が転んでも可笑しい青春を絵と言葉の中に再発見し、自分自身を褒め、楽しむ教室です。教室の詳しいお問い合わせは下記連絡先まで。

兼平ちえこ 0299-26-7178 白井啓治 0299-24-2063

ふるさと風の文庫

ふるさとの歴史物語に新しい扉を開いた打田昇三の歴史エッセイ

ふるさと「風にたずねて」(〃 / 〃) (二冊組：1000円)

我がふるさとを“風のことば絵”という新しいスタイルのふるさと表現絵の兼平ちえこの足跡を辿る一行文を集大成!! ふるさと「風のことば」(定価500円)

日々の暮らしの中にふるさとを想う心を呟いたエッセイ集

兼平ちえこ 「風邪に押されて」(定価500円)

小林 幸枝 「風に舞う」(定価500円)

ふるさと風の文庫は、ギター文化館：いしおか補聴器にて販売しております。

ギター文化館：0299-46-2457 いしおか補聴器：0299-24-3881

補聴器専門店いしおか補聴器

補聴器は、聞こえれば良いというものではありません。医師の正しい診断と、補聴器専門店としてのスキルが大切です。合わないメガネで目を悪化させることと同じことが補聴器にも言えます。お気軽にご相談下さい。

.....
当店は、「ふるさと風の会」「ことば座」を応援し、会報や風の文庫、公演チケットなどを取り扱っております。お気軽に、お立ち寄りください。

(石岡市勤労青少年ホームの並び、直ぐそば。駐車可)

石岡市石岡2158 6

電話 0299-24-3881

工房オカリナアートJOY

母なる大地の声(音)を自分の手で紡ぎ出してみませんか。

あなたの庭の土で...、大好きな雑木林に一滴みの土を分けていただき、自分の風の声をふるさとの風景に唄ってみませんか。

オカリナの製作：演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465

0299-55-4411

編集後記

このふるさと風も、本号から三年目に入り、二十五号となります。

二年という大した期間ではないように思われますが、毎月の発行となると、書く方も、編集する方もなかなかどうして大変です。

六月十日から、ギター文化館の協力をいただき、二周年の記念展を行なうこととなりました。記念展を開くに当たって、これまでの活動の足跡を振り返ってみたいところ、おや、こんなに色々なことをやってきたのかと、皆でビックリしてしまった。

この会報も、石岡を基点としてその周辺地域の五十数か所に置いていただいている。改めて勘定をしてみても驚いてしまった。改め少し前から、発行部数が足りなくなってきたことを知らされ、そんなことないだろうと思っていたのだが、五十数か所にも置いていただいているのであれば、足りなくなってきたのも当然である。うれしいことなのだが、部数を増やすとなると、これまた容易ではない。本当に嬉しい悲鳴である。

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)